

迷子の遊園地 Act 25

【離々として連々】

作・藤田ヒロシ

○登場人物

サチ（女）	……	さおり	チナの姉。重圧にから逃げ、家を飛び出る。
チナ（女）	……	宮本あゆみ	サチの妹。お姉ちゃんが大好きな女の子。
エリー（女）	……	さおり	サチがチナに譲った人形の化身
メイド（女）	……	辻ゆう子	チナの世話をする者
執事（男）	……	藤田ヒロシ	チナの世話をする者

※「サチ」「エリー」は一人二役

○イントロダクション

メイドが開演前の諸注意を説明し、一礼。

暗転

闇の中に音楽が響く。炎のような光に浮かび上がる人影。

音楽が消えると同時に人影も消える。

テーブルと椅子が二つ。テーブルには燭台とロウソク。メイドが立っている。

ロウソクに火を付けようとするが、その術を持ってはないメイド。

戸惑っているところに執事が現れる。その手にはスープの入ったお皿。

その姿に慌てるメイド。

それに構わず、

執事　よく眠れるよ。

と、お皿を差し出すが、メイドは受け取らない。

執事　火は付けてはいけないよ。危ないからね。

と、お皿をメイドに持たせる。

メイド　はい、わかっています。

静かに閉まるドアの音。

○チナの部屋

テーブルと椅子が二つ。テーブルには燭台とロウソク。

執事とスープを持ったメイドが立っている。

本を抱えたチナが飛び込んで来て、テーブルの影に隠れる。恐る恐る顔を上げ、部屋の入口を振り返る。誰も来ない。

忍び足で素早く、入口に向かうチナ。その手前で立ち止まり、より一層用心深く、部屋の外を覗く。するとそこにサチがいて、慌てて背中に本

を隠し後ずさりするチナ。部屋に入って来るサチ。

サチ　チナ。今度は本を持って行ったのね。黙って持って行くのは泥棒よ。泥棒するなんて悪い子よ。何度言ったらわかるの？

……。

チナ　チナは悪い子なの？

（首を振る）

サチ　なら悪い子になりたいの？

チナ　（激しく首を振る）

サチ　ならどうしてそんなことするの？

と、一歩踏み出す。

一歩後退するチナ。

サチ　まあ、いいわ。

と、一歩踏み出す。

一歩後退するチナ。

サチ　服も靴も帽子も、色鉛筆も鏡も櫛も、もちろん本だって言えば何でも貸してあげるよ。嘘ではないわ。だから黙って持って行くのだけは止めなさい。

と、一歩踏み出す。

一歩後退するチナ。更に一歩後退しようとして、

サチ　チナ！

身を固くするチナ。

サチ　黙って持って行くのは泥棒よ！

静寂

やがて、ゆっくりと本を見せるチナ。

それを見て驚くサチ。

チナ　お姉ちゃん、この本を貸して下さい。

サチ　いいけど……チナに読めるの？わかるの？

チナ
（本を開き、たどたどしく）タンジョウウビには……アクマがやってくる……のだと……ろう……ろう……。

サチ
「老婆」

チナ
ロウバは言った……言った……

サチ
「狙うは」

チナ
ねらうは……

サチ
「独り」……貸しなさい。

と、本を取り、読み始める。

サチ
「誕生日には悪魔がやって来る」のだと老婆は言った。狙うは独りでいる子供。甘くて柔らかいその心に爪を立て、傷を付ける。なに、心配する事はないよ。悪魔から子供を守りたければ独りにしなければ良いだけの事、簡単なことだろ？家族はもちろん、お友達も集め食事などして賑やかに過ごせばいい。嗚呼、その時にロウソクを灯し続けるといい。ロウソクの煙は神に祈りを届け――

メイドがテーブルにお皿を置く。

その瞬間「全てが止まる」刹那、サチ、チナがゼンマイ仕掛けの玩具の様に動き、去る。

その姿を見つめる執事。

○チナの部屋

テーブルには燭台とロウソクそしてお皿。メイドが椅子に座り、離れて執事が立っている。

人形を抱えたチナが飛び込んで来て、テーブルの影に隠れる。恐る恐る顔を上げ、部屋の入口を振り返る。誰も来ない。

忍び足で素早く、入口に向かうチナ。その手前で立ち止まり、より一層用心深く、部屋の外を除く。誰もいない。

安心して、部屋の中に戻り、

チナ
私はチナ。よろしくね。アナタは？

『私は……エリー』

エリー。素敵な名前！

すると、サチの声が遮る。

サチ
チナ！

と、現れる。

慌てて人形を背中に隠すチナ。

サチ
チナ。今度はなにを持って行ったの？黙って持って行くのは泥棒よ。

泥棒するなんて悪い子よ。何度言ったらわかるの？

チナ
……。

サチ
チナは悪い子なの？

チナ
(首を振る)

サチ
なら悪い子になりたいの？

チナ
(激しく首を振る)

サチ
ならどうしてそんなことするの？

と、一步踏み出す。

一步後退するチナ。

サチ
まあ、いいわ。今度はなにを持って行ったの。

と、一步踏み出す。

一步後退するチナ。

サチ
服も靴も帽子も、色鉛筆も鏡も櫛も言えば何でも貸してあげるよ。
嘘ではないわ。だからなにを持って行ったのかおしえなさい。

と、一步踏み出す。

一步後退するチナ。更に一步後退しようとして、

サチ
チナ！

身を固くするチナ。

サチ
今度はなにを持って行ったの！黙って持って行くのは泥棒よ！

静寂

やがて、ゆっくりと人形を見せるチナ。

それを見て驚くサチ。

サチ
それ、は……。

チナ
お姉ちゃんの人形頂戴！

サチ
え、あ……。

チナ
（たたみ掛け）頂戴！

サチ
（反射的に、大声で）ダメ！それは私の人形よ！あげられないわ！

チナ
頂戴。

サチ
あ、遊ぶのはいいわ。いつだって、構わない。でも返しなさい。

チナ
どうして？

サチ
（驚いて）ど、「どうして」？言ったでしょ。それは私の人形。あげられないわ。

チナ
お姉ちゃんは本棚の隅に置いておくだけ、遊んだりしない。可哀想。

サチ
か、「可哀想」？人形が？

チナ
（人形の頭を撫で）エリー、可哀想。

サチ
「エリー」……。

チナ
この子はエリー。私のお友達。（人形に）さあ、エリーお姉ちゃんにご挨拶してー

サチ
それは私の人形！

チナ
（睨むように見る）

サチ
なによ、そんな目で睨んだって、あげられないものはー

チナ
（大人びた口調で）わかってるわ。これはお姉ちゃんの人形。昔、お母さんが誕生日にくれた人形。

サチ
（驚きつつ）そうよ。

チナ
なのにどうして？私が持ち出すまで忘れていた。

サチ
（反射的に）そんなことない。

チナ
忘れてた。

サチ
そんなことない。

チナ
忘れてた。

サチ
(語気を強め) そんなことないって言って――

メイドがお皿を手にする。

その瞬間「全てが止まる」刹那、サチ、チナがゼンマイ仕掛けの玩具の様に動き、去る。

その姿を見つめる執事。

○チナの部屋

テーブルには燭台とロウソク。メイドがお皿を手椅子に座り、離れて執事が立っている。

人形を抱えたチナが飛び込んで来て、テーブルの影に隠れる。恐る恐る顔を上げ、部屋の入口を振り返る。誰も来ない。

忍び足で素早く、入口に向かうチナ。その手前で立ち止まり、より一層用心深く、部屋の外を除く。誰もいない。

安心して、部屋の中に戻り、

チナ
私はチナ。よろしくね。アナタは？

『私は……エリー』

エリー。素敵な名前！

と、再び入口に目をやるチナ。誰も来ない。

安心して、向きを戻すと、エリーの声がある。

エリー
アンシンシテ、オネエチャンハコナイワ。

と、部屋の入口とは異なる所から現れる。動きがぎこちない。

硬直するチナ。

エリー
オドロカセタ？ユルしてね。さいしょのひと言は何をどう言っても驚かせてしまうの。何度やってもね。わかるでしょ？

チナ
(声にならない音が漏れる)

エリー
(チナを指さし) 驚くのも無理はないわ。

と、部屋を見て回り、

エリー
この家に来てから随分と経つけれど、初めてだものね。こうして話せる日が巡って―

歩いている途中で突然転ぶ。

チナ
あ！？

エリー
久しぶりだから。(立ち上がり) まだ感覚がね。

と、身体を確認するように歩き回り、やがてスキップをしたり複雑な動きを始め、

エリー
(小声で) よし。

と、部屋を見て回り、

エリー
この家に来てから随分と経つけれど、初めてだものね。こうして話せる日が巡って来ないかと思っただくらいよ。改めまして、私はエリー。よろしくね。

と、チナに近づき、手を差し出す。

恐る恐る手を握るチナ。するとエリーが手を引っ張り、起き上がらせ抱きつく。

チナ
ギヤあつ！

エリー
あ、今の素敵。素直な反応。(ハグを解き)「ギヤあつ！」文字で書き起こすが難しい。だけど、伝わるわ。ぐっと。人間はそうでないと困るわ。私は人形。人形は誰かの想いを借りて動き、誰かの声を借りて話すものなのよ。

と、人形をチナに渡す。

チナ
……。

驚くのも無理はないわ。でもね、私、嘘と冗談は言わないの。

チナ
(人形と見比べて) エリー……？

エリー
そうよ。

すると、人形の手を動かしたり、足を動かしたりするチナ。それに合わせ、エリーが動く。次に人形をくすぐる。

エリー
あああああ、それはダメ！ 試したい気持ちはわかる！ けど、それは止めて！ 止め……あああああ！！！！

夢中になるチナ。しかし、途中から平然としているエリー。
それに気が付き、

チナ
え！

と、人形を揺すったりする。次第に激しく、

エリー
そう言うことじゃないの……って、だからって止めて！

止めないチナ。

エリー
壊す為に盗んだの！？

揺するのを止めるチナ。

チナ
……本当に、エリー？

エリー
確かめようがないものね。私の姿が見えるのはチナだけだし。

チナ
私だけ？

エリー
チナは動く人形と話をしている人、見た事ある？

チナ
ない。

エリー
そうでしょ。そう言うこと。

チナ
……どういうこと？

エリー
姿が見えるのは持ち主だけ。それも名前を付け、話かけてくれた持ち主だけなのよ。

チナ
……おかしい！

エリー
気付いた？

チナ
エリーはお姉ちゃんの人形だよ。嘘言っただ。

エリー
嘘と冗談は言わない。

チナ
それが嘘！

エリー
（溜息をつき）自分の納得できない事が起きた理由を相手の嘘や非常識だけに求めるなんて……小さいわね、チナ。

チナ
（ムツとする）

エリー
自分の無知も疑わないと。

チナ ……ムチ？

エリー 「持ち主」なら私が見え、チナには見えている。と言う事は……。

チナ 「と言う事は」？

エリー チナが持ち主って事。

チナ ……。

エリー あれ、嬉しくないの？

チナ エリーはお姉ちゃんの人形。

エリー 欲しがっていたんでしょ？お姉ちゃんの部屋から盗んでまで。

チナ ……悪い子。

エリー 確かに褒められた行為じゃないけど、私は気にしないよ。

チナ 本当に？

エリー 一晩早くなっただけだからね。

チナ え？

エリー 盗んだからって、お姉ちゃんの物はお姉ちゃんの物。チナの物にはならないわ。

チナ ……うん。

エリー 明日は何の日？

チナ 私の誕生日！

エリー お姉ちゃんは決めたのよ。「誕生日プレゼントに人形をあげよう」って。

チナ 誕生日は明日だよ。

エリー もう決めたからお姉ちゃんの物ではないわ。チナが盗み出して此処にあるし、話しかけたし、名前付けたし、私も嬉しかったし、出てきちゃった！おめでとう、チナ。おめでとう、私。

チナ お姉ちゃんはいつだって「ダメ」って！なのに、どうして？

エリー (拍手を止め)そこ、気になる？

と、深刻な感じで動き回る。

チナ どうして？

エリー (動き回る)

チナ どうして？

耳を塞ぐメイド。その姿を見つめる執事。

エリー (動き回る)

チナ どうして！？

エリー (口に指を当てて止まる)

再び深刻な感じで動き回る。その後を付いて動くチナ。

不意に振り返るエリー。止まるチナ。それを何度か繰り返し、

チナ (小さな声で) どうして？

テーブルに顔を伏せるメイド。

エリー (大きな声で) 大きな声を出してもお姉ちゃんは起きないわ！

チナ 私たちの声は聞こえないの？

エリー (大きな声で) 声は関係ない。お姉ちゃんは、もう隣の部屋にはいないからよ。

！

サチは捨てたのよ。私を。そして、この家をね。

静寂

チナ 嘘！

エリー と冗談は言わないの。

部屋を出て行くこととするチナ。

エリー 何処へ行くの？

チナ (立ち止まって) お姉ちゃんを――

エリー 探してどうするの？

チナ え？

エリー 「出ていかないで」って言う？「捨てないで」って泣く？理由を知

らないのに喚くの？チナが口に出来る言葉なんて、お姉ちゃんは全部わかつている。笑顔で手を振って「じゃあね」なんて別れはないのよ。ましてや、お姉ちゃんは捨てたー

メイドが勢いよく立ち、お皿を差し出す。

暗転

テーブルと椅子が二つ。テーブルには燭台とロウソク。メイドが立っている。

ロウソクに火を付けようとするが、その術を持ってはないメイド。

戸惑っているところに執事が現れる。その手にはスプーの入ったお皿。

その姿に慌てるメイド。

それに構わず、

執事
よく眠れるよ。

と、お皿を差し出すが、メイドは受け取らない。

執事
火は付けてはいけないよ。危ないからね。

と、お皿をメイドに持たせる。

メイド
はい、わかっています。

静かに閉まるドアの音。

○チナの部屋

テーブルと椅子が二つ。テーブルには燭台とロウソクそしてお皿。離れたところにメイドと執事が立っている。

本を抱えたチナが入って来る。その後ろに人形を抱えたエリー。

チナ
（椅子に座り、本を開きながら）「自分のムチを疑わないと」エリーが言った事よ。私は「嗚呼、なるほど」って思った。だからそれに従っているだけよ。

と、本を読み始める。

エリー 本当に思っているの？

チナ 思っているよ。

エリー 「知らない事が沢山ある」と？

チナ そうよ。(ページをめくる)

エリー 「知らない事を知りたい」と？

チナ そうよ。(ページをめくる)

エリー 「お姉ちゃんを知りたい？」と？

チナ そうよ。(ページをめくる)

エリー 「お姉ちゃんの本を読めば」――

チナ そうよ。(ページをめくる)

エリー 「お姉ちゃんの」――

チナ そうよ。(ページをめくる)

※『』は人形のエリーとして

エリー 『聞く前に答えた！』

(口に指を当て) し――。

と、じっとチナを見る。

チナ (ページをめくる)

エリー 『そろそろね』

(口に指を当て) し――。

チナ (ページをめくる、立て続けに)

エリー 『サン、ニ、イチ』

チナ (一瞬の間) ああああああ!!

と、背を伸ばし、すぐにテーブルに伏せる。

その一歩手前で、メイドが本とお皿をテーブルから手に取る。

エリー 『ほら』

(口に指を当て) しー。

『飽きっぽいんだから。小さい、小さい』

エリー(口に指を当て) しっ!

『苦手、嫌いを越えるには想いよ。「読みたい」「知りたい」って思
い。チナは弱いよ。エリーだってそう思っているよね?』

……。

『どうして言ってあげないのよ。エリーは意地が悪いのね』
意地が悪いなんて失礼ね。

『だって』――

(口に指を当て) 教えてあげる、教えてもらう、それが「知らない
事を知る」ではないのよ。

メイドが本を開く、

立ち上がるエリー。

エリー
「これで独りでいても独りぼっちにはならないわ」母はそう言って
大きなリボンの掛かった包みをくれた。それは金色の巻き髪をした
可愛らしい人形だった。私はすぐに名前を付けた。一緒に話した。
一緒に遊んだ。一緒に泣いて、そして笑った。

メイド
(ページをめくる)

エリー
大切な人形、お友達。だけど、一緒に過ごす事は次第に減り、いつ
の頃からなのか……すっかり私は忘れてしまった。人形は私の想い
を借りて動き、私の声を借りて話すだけ。孤独は紛らわしても、私
を此処ではない何処かへとは導かない事を知ってしまった――

本を閉じるメイド。そして、エリーを椅子に座らせ、チナに両肘を突か
せ、さっきまでとは別の場所に立ち、本を開く。

立ち上がるエリー。

エリー
大切な人形、お友達。だけど一緒に過ごす事は次第に減り、いつの
頃からののか……私はすっかり忘れてしまった。それでも独りに戻
ったわけではなかった。妹が出来たのだ。「お姉ちゃん」私を通して
動いて、私を通して話す。私の後ろ、振り向けばいつも彼女がいた。

メイド
(ページをめくる)

エリー そのくせ自分を見て欲しい時は遠慮なしに前に出て来る。「私は」我儘言つて、「私は？」ダダこねて。「私！」それは無敵。みんなの愛情を根こそぎ持って行く。

メイド (ページをめくる)

執事が部屋の隅に現れる。

エリー 「お姉ちゃんの人形が欲しい」(チナに強い視線を向け)あなたは言った。本棚の隅、埃を被って、それさえも忘れていたはずなのに、「それだけは」って思った。服も靴も帽子も！色鉛筆も鏡も櫛も！みんなあげても「それだけは」って思った。なのに！去年のあなたの誕生日に母さんが言ったの。

執事 「お姉ちゃんはまだお人形遊びなんてしないでしょ？なら、チナにあげたらどう？その方がお人形もきつと喜ぶわ」

本を閉じるメイド。次第に呼吸が荒くなる。

チナ ……お姉ちゃん？

と、上体を起こす。

エリー 私を通して動いて、私を通して話す。私の後ろ、振り向けばいつもアナタがいた。私の話のはずが、気が付けばいつもアナタの話。

チナ お姉ちゃん。

と、立ち上がる。

エリー その声が教えてくれた。アナタは自分の想いを持っていた。欲しいモノがあれば、私の部屋から盗み出してまで手に入れようとした。当然、怒った。それでもそんなことお構いなしに止めなかったアナタをいつしか羨ましいと思いはじめていた。でもそれまでだった。アナタは私にないモノを持っていたのに、私は何一つ盗み出せなかった。

チナ お姉ちゃん！

と、一歩近づく。

エリー その声が教えてくれた。誰かの想いを借りて動き、誰かの声を借りて話すだけ。人形は私自身。だから人形、それだけは――

ゆっくり一歩テーブルに近づくメイド。お皿を手にし、次の瞬間自ら飲む。

執事

誕生日には悪魔がやって来る。狙うは独りである子供。甘くて柔らかいその心に爪を立て、傷を付ける。始め、それは小さく微かな痛み。一年また一年、誕生日を迎える度に甘くて柔らかかったその心を闇へと染めて行く。

そのセリフの間に動く、サチ、チナ、メイド。執事、去る。

○チナの部屋

テーブルには燭台とロウソク。椅子にはサチとチナ。メイドが人形を持って立っている。

ロウソクに火を付けようとするが、その術を持ってはないメイド。

チナ 灯さないの？灯せないの？

メイド ……。

チナ 心配する事はないわ。悪魔から身を守りたいのなら独りならなければいいだけの事。(立ち上がり、動き回りながら) 家族はもちろん、お友達も集め食事などして賑やかに過ごすだけの事よ。

メイド ……。

チナ 心配する事はないわ。独りではないのだから。誰かの想いを借りて動き、誰かの声を借りて話すだけ。紛らわすだけ。それでも独りぼっちではなくなる。

サチ 夢は覚めるし、魔法は解ける。そんな仮初、長くは続かないよ。もう知っているわよね。

チナ (動きを止める)

サチ 夢は覚めるし、魔法は解ける。いつまでも誰かの後ろではいられないよ。もう知っているわよね。

メイド ……。

サチ もういいかい？

チナ まあだだよ。

サチ これはアナタの話よ。もういいかい？

チナ まあだだよ。

サチ ページを進めないよ。もういいかい？

と、サチとチナがメイドをじっと見つめる。

静寂

メイド ……まあだだよ。

ガクンとうな垂れるサチとチナ。

サチ (身体を戻し) 灯してみない？見えるものがあるかも知れない。

チナ (身体を戻し) 目の前が明るいのか、暗いのかさえ知れない。

サチ なら尚更。わかる事があるかも知れない。

と、マッチを取り出す。

メイド ダメよ！火を付けてはダメ！

サチ 何もしないでは、何も知れないままよ。

メイド・チナ わかっている。

サチ 本当？

メイド・チナ わかっている。

サチ それなら「知りたい」が嘘？

メイド・チナ 違うわ！

サチ 本当？

メイド 違うわ！

サチ (じつとメイドを見て)「あれはダメ」これは「これは違う」小さな自分を誤魔化して、都合のいい方、それが答え。過去も知らない。未来も知らない。やり過ぎす今だけが存在しているだけ。本当なんて何処にもないのよ。

メイド どうしろって言うの！？

サチ 行き詰ったら大声。小さいね。

メイド (何か言い返そうとするが、止める) ……子供じゃない。

サチ 子供なんて言っていないわよ。

メイド ……。

サチ それより……灯さないの？灯せないの？

メイド え？

サチ (燭台を手にして) 灯したくないの？灯させてもらえないの？

メイド ……危ないわ。

サチ 「危ない」？

燭台をサチから取るチナ。

サチ あら、アナタは求めているのではないの？

メイド ……。

サチ どうして危ないの？

メイド ……。

サチ ねえ、それは誰の言葉？

メイド ……。

サチ お姉ちゃんがいなくなった。あの日を知りたい。その想いは嘘？

メイド 違うわ！

サチ 『教えてあげる、教えてもらう、それが「知らない事を知る」ではないわ。アナタはどうしたいの？』

これはアナタの話よ。

メイド (耳を塞ぎ、震え出す)

そこへ執事が現れ、スープを渡す。それを飲むメイド。

その瞬間「全てが止まる」刹那、メイドが去り、後を追うようにサチ、チナがゼンマイ仕掛けの玩具の様に動き、去る。

テーブルには燭台とロウソク。誰もいない。

人形と本を抱えたチナが飛び込んで来て、テーブルの影に隠れる。恐る恐る顔を上げ、部屋の入口を振り返る。誰も来ない。

忍び足で素早く、入口に向かうチナ。その手前で立ち止まり、より一層用心深く、部屋の外を除く。誰もいない。

安心して、部屋の中に戻り、

チナ
私はチナ。よろしくね。アナタは？

『私は……エリー』

エリー。素敵な名前！

『本当に！？ありがとう、チナ。よろしくね』

エリー、寂しかったでしょ？

『寂しかった』？

そうよ。お姉ちゃんはエリーを本棚の隅に置いておくだけ、遊んだり、話したりしてくれないでしょ？可哀想。

『可哀想』？

あ、でも安心して。私がお友達になってあげる。もう独りではないわ。ずっと一緒よ、エリー。

と、椅子に座り、

チナ
さあ、一緒に本を読みましょ。

と、本を開くが、すぐに閉じて、

チナ
(小声で)ちよつと待っててね。

と、マッチを取り出し、ロウソクに火を付け、再び座る。

チナ
これでいいわ。

と、本を開くが、

チナ
エリー、本当はね、私、本を読むのは嫌いな。お外で遊ぶ方がいいの。なのに「危ないからダメ」って。それに「お姉ちゃんを見習いなさい」って。え？お母さんよ。だからこうして、本を読むの。

と、本に視線を落とすが、

チナ
お姉ちゃんの事は好き。服も靴も帽子も、色鉛筆も鏡も櫛も、買ってもらうのはお姉ちゃん。一番にはなれない。生まれた時から決まっていた事。寂しいよ。悔しいよ。でもお姉ちゃんの事は好き。だから私の番を待たずに、お姉ちゃんの物を勝手に持ち出すの。そうよ、悪い事よ。でもそれ以上にワクワク、ドキドキしてやめられないわ。だってお姉ちゃんの事は好き。私が欲しいのは新しいソレじ

やない。お姉ちゃんのソレ。お姉ちゃんの様に褒められたい。良い子って言われたい。一番にはなれない。だけど、同じにはなれるわ。私、お姉ちゃんになりたいのよ。だってお姉ちゃんの事は好き。

この気持ちわかる、エリー？わかって、エリー。

静寂

チナ 明日は……誕生日。ほんの……少し……近づくわ。

と、ウトウトし、眠ってしまう。

炎が燃え盛る音。テーブルの回りが明るくなる。

一層激しい燃え盛る音。

そこへサチが飛び込んでくる。

サチ サチ。今度は本と人形ね。黙って持ってー煙！？チナ！

と、口を押さえ、手で仰ぐ。

サチ チナ！チナ！チナ！（寝ているチナを見つけ）起きて！起きなさい！

と、激しく揺する。

チナ （目を覚まし）お姉ちゃー（言葉が途切れる）

サチ 早く！逃げるわよ！

チナ （咳き込む）

チナを立ち上がらせるサチ。二人部屋の入口へ

チナ あ、人形と本。

サチ そんな物ー

チナ お姉ちゃんの物だよ。

サチ いいからー

チナ よくない！

と、戻ろうとするチナ。それを押させて、サチが戻る。

サチ チナは早く逃げなさい！

チナ お姉ちゃん！

サチ

行きなさい！

と、テーブルの人形と本を手にする。

燃え崩れる音と共に倒れるサチ。

激しい光に包まれる。

その後、灯りが戻ると人形を抱えるように倒れているサチ。

メイドがゆっくりと現れ、ゆっくりサチに近づこうとするが、すぐにチナが飛び込んでくる。

一度足を止め、息を飲むチナ。

チナ

（「お姉ちゃん」と言いたいのだろう、口だけが動く）

サチにゆっくり近づき、そこでしゃがみ込む。ゆっくり手を伸ばし、サチに触れようとするが、そこでようやく……

チナ

（小さく）お姉ちゃん？

と、言っただけで這ってその場を離れ、部屋の隅へ。嘔吐。

少し遅れて、吐き気を覚えて口を押さえるメイド。

チナがゆっくりと、再びサチに近づき、

チナ

お姉ちゃん。お姉ちゃん。お姉ちゃん！

その声は次第に大きくなり、サチの身体を揺すり出し、

メイド

（ゆっくり、小さく）……おねえちゃん……？

チナ

お姉ちゃん！！

と、サチに覆いかぶさる。

メイド

おねえちゃん。

執事が現れる。

メイド

これが……。

執事

君はお姉さんが居なくなった理由を知りたくて、あの日を繰り返し、答えを探し続けた。でも見つからない。だから繰り返し続け、その結果、一つの連なった記憶はちぎれ、散乱し、あべこべになったり、不明になったり、それを作り物で埋めたり……。

メイド
これが……。

執事
君の記憶は混乱し、自分が誰かも、いくつかも、此処が何処かも、錯覚してしまう。

メイド
これが！？どれが！？

執事
(頷く)

メイド
(チナとサチを見る)

チナが上体を起こし、小さな声をあげる。

チナ
あ。

サチの懐から人形を見つける。

チナ
……エリー。エリー。エリー。エリー！

と、その声は次第に大きくなり、人形を抱え、弾むように動き回るチナ。

チナ
(立ち止まって) 無事だったのね、エリー。

と、人形を強く抱きしめ、泣きだす。大声で。やがて、座り込む。

それを見て、顔を覆うメイド。

メイド
……これが、私のっ――

と、言葉を詰まらせ、泣きだす。大声で。

執事
ロウソクの炎は君の闇を照らす。そこに浮かび上がるものが救いは限りません。

と、メイドに一步近づくと、メイドがサチに駆け寄って、

メイド
お姉ちゃん！お姉ちゃん！お姉ちゃん！

と、上半身を起こし、抱え、

メイド
ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！

メイドに目をやるチナ。

チナ
(メイドを掴み、首を横に振る)

メイド
！？

チナ
(首を横に振る)

すよ。ただ生きる。その為に苦しみは必要ないんですよ。

エリー
「誰も」ね。

執事
それが人間ですよ。

エリー
それが嘘を吐く理由？

執事
……。

エリー
人間なら誰もが同じ？あの子とあなたは――

執事
「嘘」？

エリー
え？

執事
先ほどから「嘘」と言っていますが、一体何を指してそう言っているのですか？

エリー
人間なら誰もが同じ？あの子とあなたは違う。

何か言いたげな執事を手で制して続け、

エリー
少なくともあの子は「戻りたい」と「知りたい」と願っている。アナタが戻りたくないからと言って、あの子を身代わりにしないで。

執事
次は「身代わり」と……一体何の話――

エリー
アナタの話よ。

執事
はあ？

エリー
これは「アナタの話」よ。

執事
（笑い）誰の想いと声を借りているのかわからなくなったのですか？（笑い）それは滑稽ですね。

エリー
滑稽なのはアナタよ。

執事
私が？（笑う）

エリー
人形と話せるのは持ち主だけよ。

執事
……。

エリー
これはアナタの話。アナタは誰？此処は何処？

執事
……。

エリー
アナタは執事？ならば此処はお屋敷？あの子はメイドで、私たちは

主？それなら用事を頼んでもいいかしら？

『この洋服、飽きてしまったの。新しい物を用意してもらえないかしら』

執事
……。

エリー
今すぐ。

執事
……。

エリー
あらどうしたの？聞こえていなかった？それとも主の言う事が聞けないのかしら？

執事
(微動だにしない)

エリー
アナタには無理よね、あの子にも。だって執事でもメイドでもないもの。私が主ではないのと同じ。

執事
……。

エリー
アナタは医者？ならば此処は病院？あの子が患者で、私たちは看護師？それなら白い衣装に着替えなくてはいけないわ。

『ちょうどよかった。この洋服、飽きてしまっー』

執事
(少しイラつき) 私の話では――

エリー
黙れ！

『わ！言葉汚い』

(咳払いして) 真実だけで人生は綴れない。それはわかるわ。それでも嘘や身代わりは、どれだけ重ねてもそれでしかないわ。

……。

エリー
ロウソクの炎で起きた火事で死んだのはあの子のお姉ちゃんではな
く――

執事
(イラつき) 黙れ！人形のくせに勝手にペラペラと！

エリー
黙らせなさいよ！人形なのよ！

静寂

エリー
でもそれは出来ない。アナタには話すべき事が多すぎる。

と、執事近づき、慰めるようにそっと身体に触れ、椅子に座らせる。

エリー
ずっと独りで抱えて来たものね。辛かったでしょうね、怖かったでしょうね。受け止められないから忘れ、忘れられないから逃げ、逃げられないからすり替える。望んでそんな事をする者はない。辛かったでしょうね、怖かったでしょうね。

と、アナタを撫でる。

執事
（小さな声で繰り返す）私の話ではない。

エリー
（お構いなしに）確かにあの子のお姉ちゃんは消えた。突然振り被って来た受け止めきれない現実には傷つき、記憶は混乱し、自分が誰かも、いくつかも、知れない程に生きる力が弱り切ったあの子。アナタは出逢った。励ますわけでもなく、笑うわけでもなく、遠くから眺めるわけでもなく、アナタは寄り添った……それは同じ痛みを抱えた者同士の同情でも、ましてや愛情ではない！それは！忌まわしき自分の記憶の捨て場所として「空っぽ」になったあの子が必要だったから！

執事
（小さな声で繰り返す）私の話ではない。

エリー
（怒り）お前の話だ！聞きなさい！！

『わ！言葉汚い』

執事
（小さな声で繰り返す）私の話ではない。

エリー
（執事の胸ぐらを掴んで）そう！お前は自分が何をしているのか全く理解していない。しようとすらしらない。独り勝手に堕ちて行くからそれはそれ。でもお前は！傷つき、乱れ、弱った者たちの救世主気取りで――

執事
（小さな声で繰り返す）私の話ではない。

エリー
（お構いなしに）ただ優しいだけの言葉を語り、操り、光も闇も奪う。悪魔だよ！正真正銘の……いや、それより外道な偽善者だよ！

執事
（小さな声で繰り返す）私の話ではない。

やがて、消える。

静寂

乱暴に執事から手を離すエリー！。

執事
（抑揚なく）ようやく静かになりましたね。人形のくせに勝手にペラペラと……これが私の？笑えない冗談。

エリー
（冷静に、強い意思を持って）嘘と冗談は言わないのよ。

執事
そんな事はないですよ。人の形をして、人の想いで動き、人の声で話す以上、人形だって嘘はつく。混乱もし、錯覚もし、話をでっち上げる。興味本位の……かき乱すだけの……救いも絶望もない……笑えない物語。

エリー
それは人間の仕業。人形は想いを借り、声を借りているだけ。自らのそれを……持てない。だからこの声はアナタの声。嘘をついていると言うなら、それはアナタ。冗談話にしたいと言うなら、それはアナタ。

執事
もういい。黙れよ。

エリー
それは出来ないわ。アナタは話したがっている。ずっと独りで抱えて来たものね。

執事
（小声で）黙れよ……。

エリー
辛かったでしょうね、怖かったですよね。

執事
（小声で）黙れよ……。

エリー
同じよ、あの子も。話したがっている。

エリーの顔（首）を掴む執事。そして、投げ飛ばす。倒れるエリー。

執事
（小さな声で繰り返す）人形の戯言。

と、ロウソクに火を付けようとするが、手が震えてマッチを擦れない。マッチを投げつける。しばらく呆然としているが、

執事
「誕生日には悪魔がやって来る」のだと老婆は言った。狙うは独りでいる子供。甘くて柔らかいその心に爪を立て、傷を付ける。なに、心配する事はないよ。悪魔から子供を守りたければ独りにしなければ良いだけの事、簡単なことだろ？家族はもちろん、お友達も集め食事などして賑やかに過ごせばいい。嗚呼、その時にロウソクを灯し続けるといい。ロウソクの煙は神に祈りを届け――

その間に起き上がっているエリー。マッチを拾いロウソクに火を付ける。

執事
（炎を見つめ）あの日、僕は独りだった。だから本で読んだ様に、ロウソクに火と灯し続け悪魔から身を守ろうとした。そうして母さんの帰りを待つつもりだった。「良い子で待っていてね」母さんとの約束を破る気分だったけれど、僕が悪魔に囚われたら、その方がき

つと母さんは哀しいだろうから……悪い事……つて気持ちには……なかつたんだ。

と、ウトウトし、眠ってしまう。

炎が燃え盛る音。テーブルの回りが明るくなる。

咳き込みながら目覚める執事。そして、部屋を出て行く。

一層激しい燃え盛る音。

燃え崩れる音と共に倒れるサチ。

激しい光に包まれる。

その後、灯りが戻ると人形を抱えるように倒れているエリー。

ゆっくりと現れる執事。

執事

僕が家を飛び出した事を母さんは知らなかった。僕の名前を叫びながら、母さんは燃え盛る炎に飛び込んで行ったのだと聞かされた。僕のせいなんだ。その一言を言い出せずに自分の意気地の無さにただ泣くことしか出来なかった僕を誰一人責めなかった。誰もが哀れむ目を向け、僕を抱き締めた。その感触と温もりの気持ち悪さに、僕は独りぼっちになったんだと知った。(遠くを見つめ)母さん、僕のせいなんだ。なんでも許してくれる母さんに甘えて、全てをなかつた事にして……子供だった……子供なんだ。

子供の様に涙を拭う。

エリー

(ゆっくり起き上がりながら)息を吸った時に身体の中が燃えた。もう息が出来ないとわかって、私は明るいのか暗いのかも知れない視界の向こうに窓を探した。それは逃げる為ではなく、逃がす為。

と、人形を抱える。

だって誕生日だもの。それにもう傍には居てあげられない。私の代わりが必要なもの。だけどゴメンね、投げられなかったわ。もう何もできなかった。ゴメンね、マコト。

と、再び倒れ、人形を懐に抱える。

エリー

マコト……。

執事

母さんが僕の名を呼ぶ声が聞こえる。だから、母さん。アナタが今も何処かで生きているって思ってしまうんだ。

執事

ゆつくりとしゃがんで、エリーの懷から人形を取り出す執事。
母さん。(人形を抱きしめ)許して下さい。ごめんなさい。

暗転

○チナの部屋

テーブルと椅子が二つ。テーブルには燭台とロウソク。執事が立っている。

ロウソクに火を付けようとするが、その術を持ってはない執事。

戸惑っているところにメイドが現れる。その手にはスープの入ったお皿。

その姿に慌てる執事。

それに構わず、

メイド
「よく眠れるよ」

と、お皿を差し出すが、執事は受け取らない。

メイド
「火は付けてはいけないよ。危ないからね」

と、お皿を執事に持たせる。

執事
……。

静かに開くドアの音。

本と人形を抱えたチナが飛び込んで来て、テーブルの影に隠れる。恐る恐る顔を上げ、部屋の入口を振り返る。誰も来ない。

忍び足で素早く、入口に向かうチナ。その手前で立ち止まり、より一層用心深く、部屋の外を除く。誰もいない。

安心して、部屋の中に戻り、

人形と本を抱えたチナが飛び込んで来て、テーブルの影に隠れる。恐る恐る顔を上げ、部屋の入口を振り返る。誰も来ない。

忍び足で素早く、入口に向かうチナ。その手前で立ち止まり、より一層用心深く、部屋の外を除く。誰もいない。

安心して、部屋の中に戻り、

(次のチナのセリフはサイレント)

チナ
私はチナ。よろしくね。アナタは？

『私はエリー』

エリー。素敵な名前！

『本当に！？ありがとう、チナ。よろしくね』

エリー、寂しかったでしょ？

『寂しかった』？

そうよ。お姉ちゃんはエリーを本棚の隅に置いておくだけ、遊んだり、話したりしてくれないでしょ？可哀想。

『可哀想』？

あ、でも安心して。私がお友達になってあげる。もう独りではないわ。ずっと一緒よ、エリー。

その間に語られるメイドと執事の会話。

メイド
(燭台を手にして) アナタの言った通りでした。

執事
(何かを言おうとするが)

メイド
これがアナタの話だとしても、それはそれ。作り話だとしても、それはそれ。私にとっては私の話でしかなく、それはそれ。それでいいんですよ？

執事
……。

メイド
答えて下さいよ。

執事
……。

メイド
いつだって言葉をくれたじゃないですか？もう嘘は言えませんか？

執事 (メイドを見る)

メイド (燭台を置いて、執事に近づき) 私もアナタも人形ではないんですよ。

執事 (何かを言おうとするが)

メイド 謝るのは無しですよ。

執事 (言葉を飲む)

メイド それだけは聞きません。アナタが謝る必要はない。それは私が許す必要がないのと同じ。そんな話ではないでしょ？

執事 ……。

メイド 答えて下さいよ！

執事 ……。

メイド いったって言葉をくれたじゃないですか！？もう騙してはくれないんですか！？

執事 ……。

メイド どうして跡形なく壊してくれなかったんですか！？アナタの役に立てるなら、それはそれ。私を求めてくれるなら、それはそれ。なに結局、またひとり…。

椅子に座るチナ。

本を開くがすぐに閉じて、マッチを取り出しロウソクに火を付け、再び座る。

執事 (何かを言おうとするが)

メイド だから謝るのは無しって言ってるでしょ！それは嘘よりも意味のない言葉。

ロウソクを見つめるメイド。

チナ これでいいわ。

と、再び座り、本を読む。

チナ 「誕生日には悪魔がやって来る」のだと老婆は言った。狙うは独りである子供。甘くて柔らかいその心に爪を立て、傷を付ける。なに、心配する事はないよ。悪魔から子供を守りたければ独りにしなければ

ば良いだけの事、簡単なことだろ？家族はもちろん、お友達も集め食事などして賑やかに過ごせばいい。嗚呼、その時にロウソクを灯し続けるといい。ロウソクの煙は神に祈りを届け――

と、ウトウトし、眠ってしまふ。

そこへサチが現れる。チナに近づき、人形を手にする。

サチ
『久しぶりね、サチ』

…：ゴメンね。

『謝らなくていいわ。寂しくなんてなかった』

本当？

『嘘と冗談は言わないよ』

…：そうね。

『ずっと見ていたから。サチの事、ずっと見ていたから寂しくなるとなかったよ』

(何か言おうとするが)

『今日までありがとう』

(何か言おうとするが)

『これからはチナが居るわ。心配しないで』

うん。

『サチ。アナタの方が心配よ』

私は大丈夫。

『本当？』

嘘と冗談は…：。

しばらく人形を見つめた後、

サチ

本棚の隅、埃を被って、それさえも忘れていたはずなのに、アナタが「お姉ちゃんの人形が欲しい」と言った瞬間に蘇った。一緒に話して、一緒に遊んで、一緒に泣いて、そして笑った時間。記憶の隅に追いやられていたけれど、消えていなかった時間。私の孤独を紛らわしてくれた大切な人形。大切な友達。ずっと一緒。そう約束も

したのに、それを忘れていたの。その事に戸惑った。あのままあげてしまったら想い出ごと持って行かれると思ったのかな。

テーブルに人形を置く。

サチ　チナをよろしくね。エリー。(本に触れ)これもアナタの物ね、チナ。大切にして……無理かな……怒って捨てちゃう？忘れて放っておく？出来れば傍に置いておいて欲しい。勝手って事はわかってるから。……約束ではないから。

メイド　お姉ちゃん。

しばらくチナを見つめ、そっと髪に触れた後、

サチ　ロウソクは危ないよ。いつも言っているでしょ。

と、吹き消す。

その煙を見つめるサチ。

メイド　どうして黙っていなくなったの？

サチ　ゴメー

メイド　謝らないでよ！簡単に謝らないで！

サチ　(何か言おうとするが)

メイド　簡単になのよ！お姉ちゃんがどう思っているかというと、簡単になの！お姉ちゃんが居なくなった事、その事と向き合ってきた。それ、そんな簡単じゃないんだよ！

サチ　本当？

メイド　え？

サチ　チナ。アナタは私が居なくなった事、その事と向き合ってきたの？

メイド　……(小さな声で)ヒドい。お姉ちゃん、あんまりだよ。(大声で)それ、あんまりだよ！！あの日を受け止められなくて、どんな思いをして来たと思ってるの！？混乱して、錯覚して、私が誰かも、此処が何処かも……今だって確かなものなんてないのよ！！

サチ　「確かなもの」アナタはそれを知りたいの？

メイド　知りたい！

サチ　嘘ね。

メイド
勝手ね！決めつけないで！

サチ
勝手はお互い様よ。

メイド
私が？勝手？

サチ
アナタはなぜ私が出て行ったと思っているの？

メイド
……。

サチ
なぜ？

メイド
……私の事が……。

サチ
「私の事が」……何？

メイド
私の事が、嫌いになったから。

サチ
自分に理由があると思っっているの？それ、勝手よ。私の理由は私の中。それなのにアナタはずっと自分の中ばかり探して「知らない」「わからない」の繰り返し。向き合おうとなんてしていないのよ。

メイド
……。

サチ
「わからない」？

メイド
私の事、嫌いになったわけじゃないの？

サチ
嫌いよ。始めから。

メイド
！

サチ
私を中心。その世界にアナタが現れ「お姉ちゃんなんだから」と、その位置を追われた。同時にそれは「お姉ちゃん」という新たな位置を与えられたことでもある。私だけで成立していた世界とアナタが現れたことで生まれた世界。二つの世界と二つの私。一つを愛せば、一つを嫌いになる。

メイド
……お姉ちゃん。

嫌いよ。ずっと！アナタがいるから私は「お姉ちゃん」そう「お姉ちゃん」「お姉ちゃん」「お姉ちゃん」「お姉ちゃん」アナタは私から名前さえも奪っていった。嫌いよ！なのに、「お姉ちゃん」そう呼ばれる度にそうあるうとする私が居る。そうありたいと思う私が居る。「サチ」という名前と「お姉ちゃん」という呼び名。二つの名と

一つの身体。二つに応えようとすればこの身が裂けてゆく。痛かった。痛くて、痛くて、痛くて、痛くて、たまらなかったの！でもそれを叫べなかった。まるで人形。操られている様に、二つを演じ続けた。

「お姉ちゃんはもうお人形遊びなんてしないでしょ？なら、チナにあげたらどう？その方がお人形もきつと喜ぶわ」

その言葉が教えてくれた。「捨てればいい」二つの世界、二つの名。

「捨てればいい」与えられた役でなく、求める者になればいい。どちらでもない私になればいい。

まだ私の知らない色や景色が、香りや言葉がある。私は人形ではない。何処にだって行ける。

メイド ……お姉ちゃん。

サチ (立ち位置を移動して) 何処を見ているの？私は此処よ、チナ。

メイド お姉ちゃん？

サチ 此処よ、チナ。

と、動き回る。

メイド お姉ちゃん？

と、辺りを見回す。

サチ 此処よ、此処！

メイド お姉ちゃん？

サチ 此処よ、チナ。

メイド お姉ちゃん？

サチ (動き回りながら) ちぎれ、散乱し、あべこべになったり、不明になったり……これは誰の話でもなく、誰の話でもある。これを「私の話」にと連ねたいのなら……。

メイド 教えて！

サチ 教えてあげる、教えてもらう、それが「知らない事を知る」ではないのよ。

メイド お姉ちゃん？

サチ (チナの背後に立ち) 小さな自分。それでは足りない。

チナ お姉ちゃん？

サチ 向き合いなさい。

チナ お姉ちゃん？

サチ 此処よ、チナ。

と、離れる。

メイド お姉ちゃん？

と、辺りを見回す。

サチ 此処よ、此処！

と、部屋の入口に向かう。

メイド お姉ちゃん？

サチ 此処よ、チナ。

と、去る。

メイド お姉ちゃん！

と、出口に向かうメイド。同時にその声に目覚めるチナ。

チナ 何処へ行くの？

メイド (立ち止まって) お姉ちゃんを――

チナ 探してどうするの？

メイド え？

チナ 「出ていかないで」って言う？「捨てないで」って泣く？理由を知らないのに喚くの？私が口に来る言葉なんて、お姉ちゃんは全部わかっている。笑顔で手を振って「じゃあね」なんて別れはないのよ。

メイド どうしろって言うのよ！

チナ 知ってるよ。

メイド 知らない！

チナ チナ！いつまでも小さなままではいられないのよ！

メイド
独りは嫌よ！

チナ
それは理由にならないわ！誰も独りは嫌。それでもそこに向き合わないと独りぼっちになってしまうの。

メイド
私は独りなんかじゃない！

チナ
独りよ。人形は孤独を紛らわせても、消す事は出来ない。だって、アナタの想いを借りて動き、アナタの声を借りて話すものでしかないのよ。

メイド
私は独りなんかじゃない！

チナ
独りよ。誰もが、独り。

メイド
「誰もが」？

チナ
だから向き合うのよ。

と向き合う二人。

メイド
独りなのに？誰もいないのに？一体誰と向き合えと言うのよ！？

と、チナの首（顔）を掴み、投げ飛ばす。

するとそこにサチを「持った」執事が現れチナを受け止める。

執事
「誰もが独り」でも「独りぼっちではない」

と、サチとチナを投げ捨てる。倒れるサチとチナ。

執事
全ては言葉。文字の羅列。意味などありませんよ。

メイド
……。

執事
それなのにどうしてなんでしよう。意味を求め、好き勝手に受け止め、飲み込み、空っぽよりも虚しい虚構を作り出す。

と、ロウソクに火を付け、

執事
そして嘆く。「嘘の私」「本当の私」「愛される私」「愛されない私」
それさえも、文字の羅列。意味などありませんよ。（メイドを見つめ）
そうでしょ？この私自体に意味などないのですから。

と、燭台を手にし、

執事
さあ、帰りましょう。

メイド
……何処へ？

執事 真実に、ですよ。

メイド 「真実」？

執事 そう、誰の話でもない虚構を焼き尽くし、現実……に。

と、一歩近づく。

メイド それは何処？

と、一歩後退する。

執事 場所、ではないですよ。

と、一歩近づく。

メイド それでは何？

と、一歩後退する。

執事 アナタが、私がずっと望んでいた「無」にですよ。

メイド 「無」？

痛みも悲しみもない。私と言う存在すらない。故に、孤独もない「無」にです。

と、メイドの前に立つ。

メイド ……。

執事 さあ、帰りましょう。

と、燭台を持たせる。

メイド これを望んでいたの？

執事 もう質問はよろしきよう。意味のない事。

メイド (ロウソクを見つめる)

執事 願いを届けてくれますよ。

メイド (ロウソクを見つめ) これを私が！？

執事 もう質問は終わりと云った！他に何かあると云うんだ！無いだろ！質問を重ねたところで、何も返ってほこない。それは知らないからじゃない！意味のあるものなど一切無いからだ！

と、燭台を握るメイドの手を掴み、

執事 私たちに意味など無い。「何かがある」など、虚構がみせた幻覚。さあ、よく眠れる。

と、燭台を持つ手に一層の力を込める。

メイド 痛い！

執事 ！

メイド 離して。

執事 ……。

メイド 痛み。感じる。痛い。確かなもの。離して。

執事 痛みがなんだと言う！それこそ意味のない知りもしなくなかった言葉――

メイド そう言葉！それは文字羅列なんかではないわ。声よ！私の声！！痛い！離して！

と、執事を振り払おうとする。が、上手くいかない。

すると、サチとチナが起き上がり、執事を掴み動きを奪う。

執事 止めろ！止めろ！離せ！離せ！！私は待ち続けた。「いつか」「いつの日か」と！ロウソクの煙に託した願い。でも、届かない！「いつか」は永遠に「いつの日か」やっては来ない。ならば、帰る！！あの日僕を置き去りした炎の中、母さんの腕の中に！

サチ 「あの日」にずっと留まっているアナタが、どうやって「あの日」に帰るのですか？

執事 (抵抗を止める)

離すサチとチナ。

ゆっくりロウソクに近づく執事。口か「母さん」と動く。

サチ 「良い子で待っていてね」

執事 僕は待っていたよ。待っていたんだよ、母さん。

力なく床に座り込む。

その姿をただ見つめるメイド、サチ、チナ。

静寂

サチ 誕生日には悪魔がやって来る。狙うは独りでいる子供……だからもう悪魔やって来ない。だけど、大きくなれ。小さなままではずっと怯える事になる。

チナ 誕生日を迎えたよ。また一つ子供ではなくなって、大人に――

サチ そうではないのよ。「大きくなる」は「大人になる」じゃないの。

チナ 違うの!?

サチ 時は流れ、時代は変わる。価値も秩序も正さも、変わる。それを受け止め、受け渡し、そうやって連なってゆく歴史。だけど、それを断とうとする者が居る。新しい時代の到来に自分たちを否定されたと、それに抗い過去にすがって「これが正しい」「これが常識」と固定したい者たちが居る。一方で、過去を言葉でしか捉えず、そこに流れる汗と血と涙を認めようとはせず、「それは古い」「それは終わった」と切り捨てよとする者たちが居る。

それはそうよ。人間は人形じゃないもの。空っぽなんて耐えられないから、「間違っている」とか「非常識」とか「古い」とか「若い」とか、そうやって自分の知らないものを否定して、自分が「正しさ」を手に入れていると錯覚で安心したい。大人も子供の古いも若いも、今を生きていると言うのに、向き合おうとはしない。埋めたはずの中身が虚構だと知り、ちぎれ、散乱し、あべこべになったり、不明になったり……。本当に、人間って、滑稽。

誰も空っぽから始まるの。目を開き、手を伸ばし、出逢って、触れて、さよならして、自分の中に生まれるものが「ある」と知る。その「ある」モノの正体を知りたくて、さらに目を開き、さらに手を伸ばし、出逢って、触れて、さよならして、時に深い傷を負う。それが与えるものは痛みだけとは限らない。一つだけとも限らない。明日になるとまた別の意味を持っている。これまでの「知らなかった自分」と、これからを「知らない自分」 無知と未知の間で生き、少しずつ覚えて行く。それを諦めない事。それが「大きくなる」と言う事よ。

メイド 「大きくなる」……それを諦めないから出て行ったの？捨てたわけじゃないの？そういう事なのね。

チナ 私、大きくなった？なったの？

サチ ……。

メイド
教えてあげる、教えてもらおう、それが「知らない事を知る」ではないわ。アナタはどうしたいの？

サチとチナがメイドを見る。

メイド
私は！

と、ロウソクに近づく。

サチ
現実か？虚構か？区別が付かない景色が広がっている。創造か？破壊か？区別が付かない景色が広がっている。

チナ
その景色の中で、私がちぎれ、散乱し、あべこべになったり、不明になったり……。

メイド
だから頼りない「私」 それでも諦めたくはない「私」(燭台を手にし) 頼りない灯りだけれど、これを頼りにアナタを探す。アナタを照らし、向き合う事が出来たなら、目を反らすことなく、耳を塞ぐことなく……わかり始めた確かな事。アナタの中に私が居て、私の中にアナタが居る。向き合い、受け止め、認め、そして一つに連ねる、私たちの物語。

ロウソクを消すメイド。

倒れるサチとチナ。

暗転

○チナの部屋

舞台には何もなく、メイドが床で眠っている。その脇に人形。

やがてゆっくり立ち上がるメイド。人形を手にして、広がる「景色」を見渡す。

温かい光が、メイドを照らす。

FIN

無断での転載・転用・使用を禁止